

もも・ネクタリン摘果・新梢管理・防除・講習会資料

令和8年5月

JAグリーン長野営農販売部

◆生育状況について

川中島白桃の満開は4月12日頃で、昨年比8日早く、平年比も8日早くなった。

結実は、低温の影響もあり一部の下枝で結実不良が散見されるがおおむね良好。川中島白桃も平年並みと思われるので、初期肥大を促すため早めに摘果を進める。摘果が遅れて、硬核期に多くの果実を落とすと、核割れを助長するため、予備摘果をしっかりと実施したい。せん孔細菌病の春型枝病斑、灰星病の発生はいつも通り散見される。油断せず見つけ次第併せて切除を行う。

◆摘果の時期と方法・着果量の目安(一般的基準)

1. 予備摘果・・・満開後20～30日頃に実施する。

- ①満開後20日頃になると、生理落果する果実は果面の一部が茶緑色になり生気を失い、満開後30日頃までに自然落果する。
- ②まずは、本摘果の倍の量を残す。
- ③予備摘果時期が遅れると果実肥大効果が少なくなり、果柄が硬くなり取れにくくなる！！
- ④凍霜害被害等で、結実量が特に少ない場合は、樹勢調節と生理落果の抑制のため、予備摘果を遅らせるか見送る。

2. 本摘果・・・満開後40～50日頃に実施する。 ※有袋ネクタリンは、早急に実施し、袋掛けを行う。

1) 摘果基準

表1. 結果枝別の摘果基準

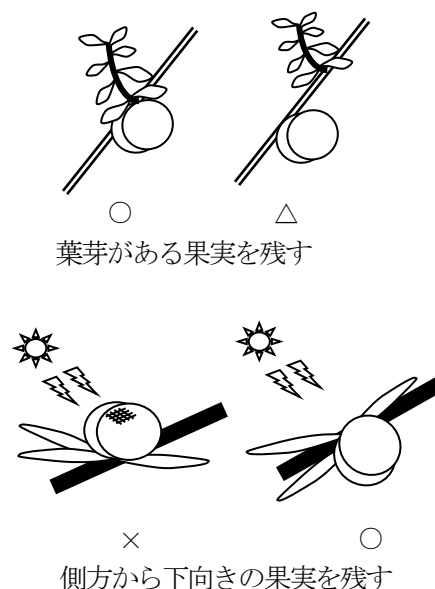
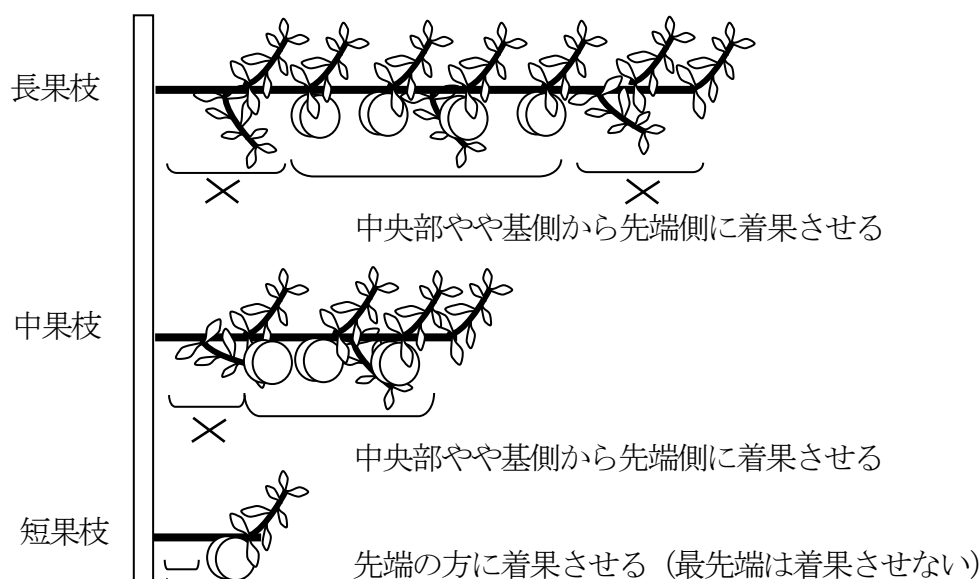
	予備摘果	本摘果
長果枝(30cm以上)	4～5果	1～2果
中果枝(30～10cm)	2～3果	1果
短果枝(10cm以下)	1果	5本に1果
強長果枝	6～7果	3～4果

表2. 葉枚数から見た着果基準(本摘果時)

	もも	ネクタリン
早生種	40枚	30枚
中生種	50枚	40枚
晩生種	60枚	60枚(秀峰等大玉品種)

3. 着果量と着果位置

1) 着果させる位置



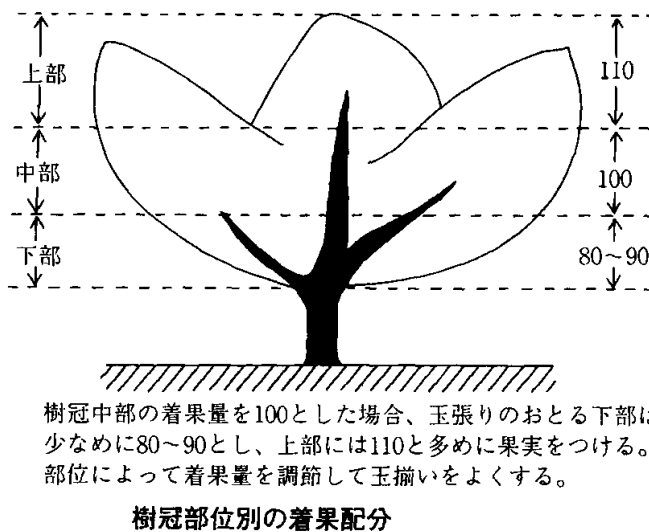
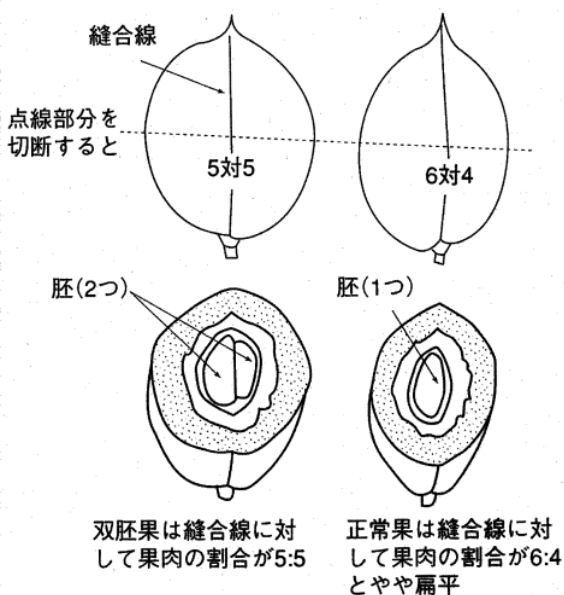
いくら中果枝でも、先端のみしか発芽していないものは、短果枝として扱う。

3) 留意点

- ①大きくて扁平な果実を残す。 ②小さい果実、奇形果、病虫害被害果を落とす。
- ③同節に2果着生しているものは1果にする。 ④葉芽がある果実を残す。
- ⑤側方向きの果実を残す。 ⑥主枝や亜主枝上の果実や結果枝の基部の果実は落とす。
- ⑦毛じ障害、うどんこ病の発生果は、無いものか軽微なものを残す。

4. 摘果上の注意点

- 1) 着果過多は肥大不足・着色不良・糖度低下となる。着果不足は収量低下や核割れになりやすい。
- 2) 樹冠上部、中部、下部によって着果量を調節する。
下部の結実が悪い場合は、下枝の分を上・中部に着果させる。
- 3) 双胚果の区別ができる様になるので、双胚果は摘果する。
双胚果とは、核果類の核(種)の中に胚があり、生育するものは通常一つであるが、二つの胚が生育し肥大した果実をいう。双胚果は成長に伴って生理落果しやすいので優先的に摘果する。
特徴は、丸々とした果実は双胚果の可能性が高い。
- 4) 双胚果の多い品種などは、適正着果量より10~20%多めに着果させる。
- 5) 灰色かび病対策 果柄部に、がく片や幼果が入り込むと、灰色かび病の原因となる。
結実よく、摘果が遅れると特に目立つため、除去徹底をする。



5. 核割れ対策

1) 核割れの発生時期

- ①生育期間中2回の発生があるが、2回目は満開後50~70日頃(硬核期の期間中)で果実肥大が急激な場合に発生し、癒合が悪く裂け目がそのまま残り、程度がひどい場合は胚が死んで生理落果の原因にもなる。

2) 核割れの発生原因と発生果実の特徴

- ①核割れ果は、硬核期の急激な果実肥大で発生する。
- ②肥よく地・窒素過多・少着果・強剪定等の樹勢が強すぎると、果実と新梢との間や果実間での養分競合によって果実肥大の歪みを生じ、変形果や核割れが発生する。
- ③摘果遅れと着果量を一気に減少させるような管理のほか、硬核期に入ってから多雨で急激に肥大すると、核割れは助長される。

3)核割れの防止対策

- ①果実へ養水分集積が極端にならないように管理をする。
- ②硬核期は果実助長に必要な栄養が貯蔵養分から新生養分に切り替わる養分転換期にあたる。
切り替えが円滑でないと果実成長に支障が生じるので、スムーズに進む管理が必要。

4)貯蔵養分の浪費を防ぐ。

- ①果実の大きさは細胞の数と肥大で決まる。細胞の数と大きさは貯蔵性や生理障害の発生にも関係しており、細胞の数が多く細胞が小さい方が貯蔵性に優れ、生理障害の発生は少ない。
- ②芽かきが遅れるほど、貯蔵養分の利用率が低下し有効利用できないため、発芽後は、早めに不要な芽は欠く。

5) 急激な果実肥大を避ける。

- ①摘蕾⇒予備摘果⇒本摘果⇒見直し摘果に至る着果管理を適期に適正に行う。
- ②本摘果1回のみという、急激な管理を行わない。

6) 硬核期には摘果を控える。

- ①硬核期は早生種程短く、晩生種程長い。生育状況によりズレはあるが、概ね満開後50～65日で6月上旬～6月末頃までで、この時期は急激な果実肥大を抑制する事が必要であるため注意が必要。
- ②基本の本摘果時期、満開後40～50日頃を意識する。核割れの多い「あかつき・川中島白鳳・早生種・ネクタリン」は特に注意する。
- ③核割れや生理落果の多い品種は、本摘果時に多めに果実を残し、硬核期を過ぎてから見直しを行う等、摘果管理を数回に分ける。

7) その他注意事項

- ①硬核期は、梅雨時期に入るため、降雨による急激な果実肥大を防ぐため、ほ場の排水対策を行う。
- ②干ばつにより過乾燥を防止するため、適度なかん水(過剰かん水は控える)を行う。
以上2点から適度な土壌水分管理が必要。
- ③多肥(窒素)を避ける。特に追肥を行う場合は注意する。

◆新梢管理・・・摘果を実施しながら、コマめに行う。

徒長枝は無駄なエネルギーを使い、樹形も乱し良品生産の敵となる。

1) 徒長枝の発生予防・・・葉液の掛かりにも影響する。

- ①主枝・亜主枝の背面や大枝の切り口、さらに長・中果枝の基部10cmの直上芽は徒長枝となりやすいので、摘果時か日を改めてきっちりかき取り処分する。

2) 摘心

- ①枝の背面から出る芽(新梢)は全部をかき取るのではなく、必要に応じて捻枝や摘心処理して日焼け防止と結果枝確保に利用することが大切である。
- ②5月下旬と6月下旬の時期に新梢基部から5～7葉(基から5～6cm)で切っておく。
副梢が伸びているような強い徒長枝の場合は2葉位で切っておく。

3) 捻枝(二つ目的がある)

- ①主枝延長枝など主軸の枝と競合する2・3番目の新梢や内向枝を捻枝することにより樹形構成・結果枝確保ができ、秋冬期の剪定量も軽くなり樹勢は安定する。
- ②直射日光が当り日焼けを起こす幹や主枝の背面に新梢を捻枝誘引して覆いかぶせることによる日焼け防止策の2面である。
- ③収穫時期前後に日差しが強い場合は、やや長めに切る。

4) 捻枝の方法 (誘引が必要)

- ①新梢の根元の色が変わる5月下旬～6月上中旬頃(新梢長50cm位)に実施する。
- ②新梢の根元をしっかりとつまんで、3節目を半回転ひねり曲げる(ねじり伏せる)。
- ③力を入れて行う。(プチッと音がし木質部と皮が剥れる)

5) 新梢の誘引

若木や幼木の主枝・亜主枝候補は、支柱を添え丁寧に誘引する。主枝先端を下げない。上げすぎない。

◆袋かけについて

- ①被袋が7月以降になると、果面の肌荒れが多くなり、裂果しやすくなるため、6月末までに行う。
- ②被袋が早すぎると肥大に影響があり、生理落果する果実も判別しにくくなる適期に実施する。
- ③品種にあった果実袋を使用し、適期に被袋する。(なるべく天気のよい日)
- ④モモせん孔細菌病が多い場合は、早めに袋掛けを行う。

◆芽とび枝や先枯れの原因と当面の対応策

7月下旬の花芽分化初期に高温障害に合うと葉芽から花芽に変わる。一部のネクタリンや川中島白鳳・白桃に発生が目立つ。このため、新梢のある部分まで切り戻すか、9月10日頃の秋季剪定で切除する。樹体が高温にならないように、日焼け防止資材の塗布や日焼け防止枝を置く。

◆かん水について

結実後、初期生育を良くし、樹勢や玉肥大向上のため重要になる。

この時期は、平年並みの降水量でも、不足する時期となるため、積極的に実施したい。

◆追肥

弱樹勢樹は、葉色をみてやや薄いようなら追肥又は葉面散布を行う。

満開後50～70日頃は、極端な窒素の施用は控えたい。下記資材を参考にする。

追肥資材	10a当り施用量	葉面散布資材	散布濃度
有機専科	1袋	アミノリット青	500倍
ノルチツソ	0.5袋	尿素	500倍

◆葉面散布肥料の活用について

- ①総合的な品質向上対策として、アミノ酸等のケルパック66(5,000～1,000倍)、友果(500～1,000倍)、オルガミンDA(1,000～2,000倍)等を利用する。
- ②葉健全化や光合成能力向上として、マグネシウム(苦土)のリーフマグ(1,000倍)、グリーントップ70(500倍)等を利用する。
- ③今後はマンガン欠乏の発生が見える時期となる。毎年発生がある園は、発生前からの5月以降にグリーンデイズ(500倍)・硫酸マンガン(250～300倍、混用の場合は500倍)・葉面散布用硫酸マンガン(200倍)を利用する。
- ④収穫時軟化防止対策として概ね6月中旬からカルピタ(1,000倍)やストピットII(500倍)を利用する。ただし、一般的なカルシウムとりん酸資材は混用不可なので注意する。

◆せん孔細菌病の春型枝病斑と灰星病を除去しよう！！

発生量は少ないが、春型枝病斑の発病は確認されている。薬剤防除だけでは、対策不足になる。積極的にほ場を点検し、5月下旬までに剪除する！その後も見つけ次第剪除する。